No.77
2018. 12. 10

# 地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■オンリーワンNGOをめざして …… 1
■支援地から ラオス …… 2
■支援地から ネパール …… 3
■支援地から カンボジア …… 4
■「マジカルバナナ」で伝える「エシカルバナナ」 …… 4,5
■地球の木でのインターンを終えて …… 5
■パタゴニア関内店で展示販売、よこはま国際フェスタ2018 …… 6
■地球の木と私 …… 6
■グローバルeye …… 7
■気仙沼だより …… 7
■活動日誌 …… 7
■インフォメーション …… 8
■編集後記 …… 8

## オンリーワンNGOをめざして

2018年1月から8月にかけて中野真理子さんと乳井京子さんが、JICA東京、シェア・ザ・プラネット、ジャングル・コアの共催する12日間の研修「NGO『オンリーワン戦略講座』」に参加しました。以下中野さんからの報告です。

### 自分たちの立ち位置を確認

「個性を明確にし、次のグランドデザインを描き、活動を未来に向ける研修」というチラシの文句から、会員の高齢化による減少、次世代を担う活動メンバーの不足などの課題に直面している地球の木が、今後新しい仲間を迎えるためにも今ここで自分たちの立ち位置を確認し、未来への展望を話し合う機会とすることができるのではないかという思いで参加しました。

### 地球の木の存在意義って?

まずこの講座で参加者に求められたのは、「あなたの団体は何者なのか?」「どんな社会課題を解決したいのか?」を明確にすること。数あるNGOの中で他とは違うオンリーワンのNGOとしての特徴や存在意義をわかり易く説明すること、更に、規模の割に数多くの活動を行っている地球の木のなかで、コアとなる活動は何なのか、改めて問われたのです。

久しぶりに「設立趣意書」や「ビジョン」「ミッション」を振り返り、地球の木のアイデンティティを再確認することから始めました。

### 支援することで終わらない

地球の木は「アジアの弱い立場にある女性や少数民族の人々の自立のための支援をしながら、支援地が抱える問題と無縁ではない私たち自身の暮らしを見直す」ことを行ってきましたというのが私たちの通常の答えです。この文言の前半は、オンリーワンという物差しをあてるとみると、多くのNGOが目指していることで独自性というには曖昧に思えます。しかし後半は生協にルーツを持つ地球の木だからこその視点であり、支援することで終わらない、私たち生活者の側の在り方を探りながら地球の木が社会にむけて発信するメッセージであると思います。

### 今後の活路を見出すには

講師の方たちからも、「地球の木さんは生活者の目線でグローバルな課題を伝え、自らのライフスタイルを見直すというスタンスで他のNGOと差別化できるのではないか」と、背中を押されました。

NGOの支援も最近では支援する側・される側といった構造から対症療法に留まることなく、現地の人々が自分たちで解決する力をつけていくことで公正な持続可能な社会を共に目指す方向になってきています。地球の木も支援現場を持つからこそ、一般論に終わることなく、よりいっそうリアリティのある発信ができるはずです。そこに地球の木としての今後の活路が見いだせるのではないでしょうか。

### これからの充実した活動へ

今後はこれから始まる3ヵ年計画の策定の中で討議されることになるでしょう。

オンリーワンNGOとしての今後に向けての独自の方向性やそれを端的に表すわかりやすいスローガンの策定、ファンドレイジングにつながる広報の仕方など、この研修で学んだこの機会に地球の木の活動を深く掘り下げて、より絞り込んだ、充実した活動へと結びつけていければと願っています。

（中野 真理子）

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 堀 千鶴 ■編集 会報作成チーム ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

ラオス支援地の水田

## from Laos

# ～ 改めて確認したい ～
# 村の人たちの暮らしをしっかり理解しての国際協力

ラオス支援地でのワークショップ

今回の事業（村人が村の土地や森、川などの自然を主体的に守り、管理・利用していけるようになることを目指す）の大きな特徴は、まず事前にしっかり対象村の調査を行い、きちんと村の事情を知ってから、より適切な活動を行っていこうとしている点にあります。

例えば井戸。日本の27倍もの乳幼児死亡率の一因は、衛生的な水の確保が難しい点にあると言われています。こういった点からラオス中で井戸の支援が行われています。しかし実際には、村を回ると至るところに壊れた井戸を見かけます。井戸のすぐ横に井戸があることも。高いニーズがある一方で、無駄としか思えない支援の典型が井戸であるようにも思えます。なぜこんなことが起こるのか？

大きな原因の一つが「まず井戸ありき」の支援者側の体制にあることは明らかです。資金を集め、人件費をまかない、成果として写真を撮って報告することに夢中で、本当に村人が必要としているかは二の次になる。その結果、井戸がたくさんある村にも井戸が掘られる一方で、困っている人は相変わらず衛生的な水が得られないなんてことも起こります。

調査では、村内の井戸の数、設置場所などをきちんと把握してから、必要な場合にのみ設置するように準備を進めています。できる限り既存の井戸の位置を地図にとり、利用者の状況も聞き取るようにして、これまで以上に、よりきれいな水の得にくい人たちから支援することを目指しているのです。

ラオスではNGOのスタッフが村に行くときは必ず行政官が付き添います。多くの場合、村人は、くれるというものに文句は言いません。その結果が援助依存、つまりは自立の機会を奪うという恐ろしい結果に結びつくことを常に意識していかなくてはなりません。村はあるのに水はないのか？水汲みに時間がかかるのは悪いことか？わたしたちの価値観ではなく、村の人たちのくらしをしっかり理解した上でしなければ、国際協力は成り立たないことをあらためて確認したいと思います。　（JVC東京事務所ラオス事業担当　木村 茂）

## アジアの国を知ろう

### ラオスワークショップ
# 「森の中で森のはなし」

12月2日、ラオスチームは横浜市瀬上沢の森でワークショップを行います。それはそもそもこんな思いからです。

1年前の12月、「上郷・瀬上の自然を守る会」の角田さんの案内で、瀬上沢の緑地を歩きました。この緑地、ラオスの村の人が歩いたら何と言うだろう。食べられる葉はすぐに見つけ、薬草を指し、「この奥にはきのこがありそうだ」とか、「ここは田ができる」「家を建てるならここだろうか」など、この場所の恵みを有難がるだろう。角田さんの口調の中に、ふつふつとした思いを感じながら、やがてこの山が削られ、この谷が埋められ平らになって、広い道路が通り街ができ売られるのだろうと思いました。

ラオスのワークショップをここでやるということ、それはラオスの村の暮らし、森の開発のことも想像し易く、また瀬上沢の開発の場合との違いや共通するところを考えたり、さらには私たちの今の暮らし方、価値を考えるきっかけになるかもしれないとも思いました。何より誰でもコンクリートの電信柱の下のベンチより、大きな木の木陰で、木に触りながら風を聞き初冬を感じながら、様々なことに思いを馳せた方が気持ちいいに決まってるでしょ。さてどうでしょうか。次号に報告しますね。

（ラオスチーム　久保田 由紀子）

from Nepal

# 私がネパールの農村で学んだこと

地球の木の現地パートナーNGO・SAGUNは「幸せ分かち合いムーブメント」の活動の一つに会報誌「ロシラハール」を発行。周辺に追いやられていた人たちの声を発信しています。SAGUNの副代表エソダ・シュレスタさんが、最新号に寄稿したものの抜粋をお届けします。

会報誌「ロシラハール」

## 始まりは…

私がネパールで、農村開発に関わるようになったのは1992年のことでした。人道支援を行う国際NGOの活動に参加し、生まれて初めて農村部に行きました。そこでは食べるものは少なく、教育、雇用の機会、交通の便、医療施設も限られていました。ある時、2, 3時間かかる道のりを歩いて健康診断に行くという妊婦と友人の女性に出会いました。忍耐強く、笑顔を絶やさないこの二人の女性を目の前にして、都会で育ち、便利なこれまでの私の生活が、当たり前ではない事に初めて気付き、衝撃を受けました。カトマンズで学校に行き、社会人類学の修士号を取得した私でしたが、社会変革の本当の勉強は、この農村部に足を踏み入れた時に始まったのです。

## ネパールは貧しい？

農村の人たちに会うたびに、私は自分が持っていた彼らに対する認識を根本から覆されました。私が訪れるたびに楽しく過ごせるよう気遣い、茶菓のもてなし、村人との橋渡しなどをしてくれる老夫婦がいたり、また遠くの村を訪れた時には、男性は花束を手に持ち、女性たちは競い合って作ったという長い花飾りを持って、初めて会う私たちを待っていてくれたりしました。まるで大切な親せきの人たちをもてなすかのように。「ネパールは貧しい国だ」とよく言われます。しかし見返りを求めないこのような厚意に触れて考え込んでしまいました。「貧しさ」とは一体何を意味するのかと。

2015年に来日したエソダさん

## 社会変革

開発分野に足を踏み入れた時から、実践者たちの間で考え方の変遷がありました。最初のキーワードは「女性」。しかし女性だけの問題ではなく男女ともにそれぞれの立場で関わっていく「ジェンダー」の視点が大事だというように変わっていきました。

その後、これまで当然と考えられていた概念が大きく変化し、「ソーシャルインクルージョン」に重きが置かれるようになってきています。これは弱い立場にある人々を社会の一員として受け入れ、だれ一人取り残さず、支え合おうという考え方です。しかし独裁的な文化が残り、誰も責任を取ろうとしない社会にあって、いかにすれば全ての人々が認められ敬意をもって受け入れられるようになるのでしょうか？ 変革というものは自動的に起きるものではありません。真の変革はあらゆる構造、価値観、信念などが変わって初めて実現します。

ネパールの多くの省庁が、男女平等、ソーシャルインクルージョンへの関心を示しているものの、取り組んでいる当事者に持つべき価値観が徹底されていず、人々の考え方がどのように変わるべきかについての説明が無いのです。

## 開発に関わる者が留意すべき点

開発において、男女平等の概念を取り入れる狙いは、女性だからと差別せず、可能な限り機会を与える。ソーシャルインクルージョンに関しては、カースト、階級、障がい、年令による差別の根本にある問題を考え、社会的に排除されている人々にあらゆる過程で関わっていくことであると考えます。以下、具体的にいくつか挙げてみます。

＊一人ひとりに価値があること、協働することの大切さを伝える。
＊階層による言葉の使い分けをせず、平等に接する。
＊社会的地位、役職に関わらず、全ての人に敬意を示し、差別の原因となっている構造的な問題を取り除く。

ネパールチームでは「ロシラハールを読む会」を開いています。どなたでもどうぞご自由にご参加ください。

（会報作成チーム　浜辺 美英子）

from Cambodia

# カンボジアの現状に思う

地球の木も販売しているバッグの工房で

毎年2回行くカンボジアですが、プノンペンのヴァタナックタワーはもちろん最近のシアヌークビルやコンポントム、バタンバンなど第二都市、第三都市の発展にも驚かされます。プノンペンではどこに泊まっても朝7時から聞こえてくる工事現場の音。なかなか寝れないことも多い出張です。きっとカンボジアは急激に発展しているのだろうと感心すると同時に、不安もあります。

今年7月の選挙では中国と密接な関係にあるフン・セン率いるカンボジア人民党（CPP）が圧勝。仕事関係で出会う地方出身のカンボジア人と話していると、皆「カンボジアは中国の一部になってしまった」と嘆き、「諦めた」と口を揃えて言っていました。さらに「僕らにはなんの利益もない政治が続くけど、すくなくとも安定はしている」と。

いま私が目にしているカンボジアの発展は民主主義を無視した外国投資や支援によるもの。その発展がどこまで地方の農家や手工業に携わる人々、シングルマザー、そして「基本的人権」という本当の意味での社会の発展に繋がっているかはわかりません。

カンボジア人の多くが口を揃えて中国批判をするなか、彼らも知らない事実があります。それは欧米各国がカンボジアの独裁政権と不正選挙に懸念を抱き選挙支援を中止したなか、中国と一緒に支援を続けた日本。いろいろ考えているうちに、カンボジアの発展が日本と中国の外交ゲームの産物のように思えてきました。

地球の木が支援するCWCC（カンボジア女性緊急救済センター）は貧富の差から声をあげられない被害者達を支援していますが、それも貧富の差が広がれば広がるほど難しくなっています。カンボジアは被害者が声をあげられないほど、さらに格差が広がる社会に向かっているのでしょうか。私たちの税金を使い街が整備され、カンボジア政府が潤うなかで、取り残される人々に手を差し伸べる地球の木とCWCCの活動。矛盾しているようにも感じられる2つの支援ですが、両方の支援に頼っているのが今日のカンボジアの現状です。

新しく就航したプノンペンと成田を結ぶ全日空の機内はある日、日本観光へ向かうカンボジア人でいっぱいでした。カンボジアはもはや貧しい国ではなく、社会が差別化されている国なのでしょう。この政権がとこまで続くのか私たちにはわかりませんが、少なくとも取り残される人の声が少しでも届くように、耳を傾けられるようにしたいと思います。

（理事　古田 麻利子）

# 「マジカルバナナ」で伝える「エシカルバナナ」

## ●「マジカルバナナ」の目的

私たち出前講座チームは、18年前から学校や地域で「マジカルバナナ」のワークショップを実施してきた。

その目的は ①身近にあるバナナを通して、私たちの「買う」「食べる」という行動が、世界のどんなところに、どのように影響しているのかに気付く ②バナナの裏側にある、生産者の暮らしや安全性などについて考える ③生産者と私たち消費者がともに支えあうもう一つの貿易「フェアトレード」についても考えるというものである。

## ●疑問の答えを求めて

このワークショップは、参加者が台本を使ってバナナ農園やバナナ村のミニ芝居を演じる部分がメインで構成されている。演じた後、各々の立場になって気付いたことや考えたことを発表しあうのだが、このワークショップをいつも実施しながら疑問に思うことがあった：地球の木がこの教材を作成してから20年近くになるが現状はどうなのだろう。大農園での過酷な労働条件、飛行機での農薬散布による健康被害、見あう賃金がもらえなくても働かなくてはならない人々。そのような中で安心して食べられるバナナが作れるのだろうか？ 現状は少しは良くなっているのだろうか？ と。

そんな時、「甘いバナナの現実」というチラシを目にした。『バナナと日本人』（注）から40年…フィリピンと私たちの関係性を考える…とあった。少しでも疑問が解けるのではないかと参加することにした。「エシカルバナナ・キャンペーン」と銘打った7月末のこのイベントは、ミンダナオ島からゲスト2名が来日。バナナ農家に寄り添い活動を続けている彼らから話を聴くことができた。　（注）岩波新書、鶴見良行著1982年発行

中学校でワークショップをする筆者

## ●甘いバナナの苦い現実

一人は、農薬（殺虫剤、殺菌剤）が地域住民に与えている健康被害について訴えた。企業が「効率性」を重視して空中散布を行うが、現在もバナナだけでなく、通学中の子どもたちや人々の暮らしの上にも農薬が降りかかっている。

もう一人は、バナナ農家（農地改革で土地を得た農家）と大手アグリビジネスとの間のアンフェアな契約について語った。大企業が巨額の利益を得ている一方で、バナナ農家たちはどんなに懸命に働いても貧困から抜け出すことができないという現状だ。

彼らは、「バナナを食べる時には、その“甘い”バナナがどこから来ているのか、産地でどんな“苦い”できごとが起こっているのか、そのことに想いを馳せてほしい。そして、そうした状況を変えるように、行動を起こしてもらいたい」というメッセージを伝えに来たのである。

## ●「マジカルバナナ」で伝えたい

このイベントに参加し、振り返るきっかけを得て、私たちのワークショップ「マジカルバナナ」はまさに彼らの訴えている「エシカル（倫理的な）バナナ」そのものではないかと思えてきた。現状は何も変わっていないのだ。私たちが、自分たちの作成したワークショップを実施し広めていくことによって、彼らの訴えていることが、そして「エシカルバナナ」が多くの人に浸透していくのではないだろうか。（出前講座チーム　山崎 信子）

### 地球の木は“エシカルバナナ・キャンペーン”に賛同しました

日本に入ってくるすべてのバナナが「エシカル（倫理的な）バナナ」になることをめざす運動で、NPO法人アジア太平洋資料センター、NPO法人APLA、（株）オルター・トレード・ジャパンが呼びかけ人となって2018年夏に開始されたキャンペーンです。

## 地球の木でのインターンを終えて

桜美林大学4年　外間 ユミ

5月の総会でお手伝い（中央）

私は『地球の木』で80時間の実習を4ヵ月間の中でお世話になりました。インターンをする前は、大きな支援をしないと意味がないと捉えていましたが、日常生活の中でも小さなことが途上国の為になるというポジティブな思考へと変えることができました。

やりがいのある4ヵ月になりました。『地球の木』の皆さんは本当に温かく迎えてくださり自分が疑問を持った時にすぐに聞くことができました。自分がインターン学生であるにも関わらず『地球の木』のメンバーとして仲間に入れてくださって嬉しかったです。たくさんのことを優しく教えてくださって、質問、インタビューなども快く受け入れてくださりありがとうございました。授業、実習、アルバイトと3つのことをするのは大変でしたが、何一つ無駄はありませんでした。ここでインターンができてよかったです。

人は誰かの為に生きたいと考えます。これは、人間にとって生きる原動力としてつながっていくことができます。支援をしたい気持ちがあれば無条件で国際協力に参加することができます。なぜなら、人間は誰かの役に立つように作られているから。

日本に居ながらも日本で困っている人（日本人・外国人問わず）を助けることが生きていくうえで非常に重要なことだと思います。そして、そこで初めて自分が生かされていることに気づきます。そこから日本を出発点として、海外への道を開くことも良い考えだと思います。

国際協力というワードはまだまだ世間には詳しく知られていない感じがします。奥深い問題が自分の知らないところで起きているというのはあまりにも残酷すぎます（途上国の現状、貧困、女性問題、児童労働etc.）。いろんな人に世界で起きている状況を知ってもらいたいです。だから、小さな働きかけでも誰かが興味を示してくださるようにアクションを起こしていけるように頑張りたいです。人間同士の助け合いが必要な時代です。このインターンで学んだことを活かし、自分も誰かの役に立つような人になりたいと思っています。たくさんの学びをシェアしていただき、ありがとうございました。

# パタゴニア関内店で展示販売

**「フェアトレード」を知らない方たちに楽しみながら「フェアトレード」を知ってもらおう！というのを目的に、9月29日、パタゴニア関内店のご協力のもと「フェアトレードマーケット」が開催されました。**

雨が降る、肌寒い日でしたが30～40代を中心に多くの方が来店されました。特に興味・関心度が高かったのはカンボジアの蚊帳をリサイクルして作っているバッグ類で、蚊帳を初めて見た、という若い方もいらっしゃいました。蚊帳バッグの色のきれいさや軽さにまず興味を持たれていましたが、現地カンボジアの生産者の状況や暮らしぶりなどを伝えると、「バッグひとつにたくさんの人の思いや苦労が詰まっているんですね。今までそんなことを考えたことが無かったです」と、その後も話が弾み、フェアトレードを知ってもらえるきっかけになりました。

横浜市中区を中心に活動している他団体も参加しており、お互いの活動を知ることもできました。中区からもっとフェアトレードを発信できるように活動したいです。

（事務局クラフト担当　竹内 千佳）

パタゴニアと初のコラボ！

# よこはま国際フェア2018

**10月6日・7日、みなとみらい駅を降りてすぐのグランモール公園で開かれた「よこはま国際フェスタ」。「ともに生きる横浜 ともに創る世界」をテーマに国際協力・多文化共生に関わる100近い団体が集いました。**

あなたも来年行ってみませんか

地球の木のブースでは、カンボジアのクラフトやラオスのコーヒーなどの販売を行いました。当番の理事たちが、立ち寄って下さった人たちに支援地のことなどを丁寧に語る姿が印象的でした。「出会いや団体の内容を知りたくてブースを訪ねてくる方が多いので、かなりしっかりと話をすることができます。また我々も他団体のブースでいろいろ質問し、他の販売方法や展示方法を知りとても勉強になります」とNさんの感想でした。

「よこはま国際フェスタでSDGs（国連で採択された持続可能な開発目標）を知ろう！」ということもテーマに掲げられており、SDGsのPRのパネルを数多く目にしました。「SDGsラリー」があったり、それぞれの参加団体ブースの団体名パネルには、その団体が取り組んでいるSDGsの目標のマークが表示されていたりし、わかり易く楽しく学べるようにいろいろ工夫がされていました。

（会報作成チーム　沼田 由美子）

## 地球の木と私

# 地球の木とつながっていたい

ナマスカール！（ナマステのていねい語）ネパール出身のリタ・タパです。安全で、科学が発展した日本に来ることは子どもの頃からの夢だったので、修士号を取った後、日本に留学することにしました。

2014年に来日、日本語学校を経て東京都市大学の博士課程に入り、2年目になります。ネパール大地震後に建てられた仮設シェルターの快適さに関する研究をしています。

地球の木との出会いは、私がネパールでユースクラブの代表をしていた2007年。SOARSのニルマラさんが、丸谷さん、乳井さんやスタディツアー・メンバーに紹介してくれました。我が家にサキちゃんがホームステイし、本当に楽しい時を過ごしました。

私は、社会の役に立つことがしたいと思っていたので、アジアの人々の支援をしている地球の木の会員になることにしました。世界には助けを必要としている人々がいるということを日本の人々に伝え、支援を呼びかける地球の木の活動が気に入ったからです。私は、毎年、平楽中学校の国際学習に参加して「ネパールわくわくワークショップ」で、ネパールの暮らしや文化を紹介します。識字の大切さや私の研究についても話します。生徒たちは興味をもって質問してきます。

これからもいろいろなワークショップに参加したいと思っています。

（横浜市　リタ・タパ）

# 多文化都市メルボルンでネパールの友だちと再会

日本にネパール人留学生が急激に増えている。地球の木のネパールプログラムで知り合った村の若者が何と5人も日本に来ているのは驚くべきことだ。ネパールの若者たちは新しい未来を求めて世界のあちこちに飛び出している。

今年5月、オーストラリアを初めて訪れた。楽しみのひとつは、オーストラリアに留学したネパールの友だちに会うことだった。また、多文化主義のオーストラリアにも関心があった。まず訪れたのは、シドニーに次ぐ第2の都市メルボルン。経済や金融、そしてアートの中心地とあって、多様な人々が住む都市だ。町には英語はもちろん、中国語、スペイン語、韓国語など、たくさんの言語があふれていた。ヨーロッパ系とアジア系の人々が混在して、未来都市に迷い込んだような感覚だった。

ススマさんと

メルボルンで、ネパールイマドール村のユースクラブ会長だったプラビナさんと約10年ぶりに会うことができた。お金をためて留学し、大学で会計士の資格を取り、会計事務所で働きながら、クリーニング店でも働いている。「メルボルンは暮らしやすく、仕事も見つけやすい。外国人も平等に扱われるので、ここに来てよかった」と言いながらも、子どもが成長したらネパールに帰りたいと言っていた。

プラビナさんと一緒に移民博物館に行った。展示はたいへん工夫が凝らされていて、オーストラリアの移民政策の変遷がよくわかった。イギリス人とアイルランド人を優先する「白豪主義」から、戦後は国防のためや経済振興のため、人口を増やす必要に迫られ、多民族国家の道を歩んでいる。民族、皮膚の色、国籍による移民資格の差別を撤廃し、多文化主義を取るようになったのは1973年、ほんの45年前だ。その時々の歴史の流れ、経済、国の事情で人々の移動が左右されることがよくわかる。

地球の木の招聘で20歳の時に来日したこともあるススマさんもオーストラリアの大学を卒業後、シドニー湾クルーズの会社で働いていた。「自分の希望した学部には入学できなかったけれど、お金を貯めてネパールに帰り、ヤギ牧場を作りたい」とネパールで獣医学を勉強した動物好きの彼女は夢を語った。

現在、神奈川県には173ヵ国から約198,500人の外国人が住んでいて、その数は年々増えている。外国人労働者を日本に受け入れるための新しい政策が進められているが、他国の例から学び、労働力としてだけでなく、暮らしやすい受け入れ態勢を官民両方で整えることが急務だと思う。日本で、そしてオーストラリアで夢を育てる若者たちに良い未来を！

（丸谷　士都子）

## 気仙沼だより その23

秋晴れの11月10日、生活クラブ生協神奈川主催の「東日本大震災・復興支援まつり2018年inみなとみらい」が、被災された方々、生活クラブ生協、生産者、およそ100団体が参加して開催された。

地球の木も参加団体（理事長の堀さんが大会アピールしました）としてブース出展、大震災後支援してきた気仙沼のNPO法人Tree Seedのメンバー3人とともに気仙沼特産のふかひれスープや塩辛などを一緒に販売した。「今年も会えた」と言って購入してくださる方々も多く好評のうちに完売。売上はTree Seedのこれからの活動資金となる。継続的に子どもコミュニティづくりに関わっていくために、できることを無理せず頑張っていきたいという。そのためにも地球の木とのつながりは大切にしたいとも。

復興まつりは、女川の獅子舞などパフォーマンスもにぎやかに繰り広げられ共に楽しめた。

（大嶋　朝香）

## 活動日誌（9月～11月抜粋）

**9月**

| | |
|---|---|
| 3日 | 第4回理事会 |
| 17、18日 | デポー展示会（緑園） |
| 20、21日 | デポー展示会（ちがさき） |
| 23日 | ひらつか市民活動センターまつり |
| 25、26日 | デポー展示会（鎌倉） |
| 29日 | パタゴニア関内店出展 |

**10月**

| | |
|---|---|
| 1日 | 第5回理事会 |
| 6、7日 | よこはま国際フェスタ2018 |
| 7日 | なか区民活動センター祭り |
| 8、9日 | デポー展示会（市ヶ尾） |
| 11日 | エッコロ講座（逗葉コモンズ） |
| 16日 | 地球の木カフェ（小田原） |
| 20日 | デポー展示会（東戸塚） |
| 22、23日 | デポー展示会（霧が丘） |

**11月**

| | |
|---|---|
| 1日 | 地球の木カフェ（逗子） |
| 4日 | かまくら国際交流フェスティバル |
| 5日 | 第6回理事会 |
| 10日 | 東日本大震災・復興支援まつり |
| 11～16日 | ラオス視察訪問 |
| 17日 | オルタ館フェスタ |
| 24日 | 地球の木カフェ（茅ヶ崎） |
| 30日 | デポー展示会（ほんもく） |

## 「地球の木」カレンダー2019「この空の下で」 好評発売中

2019年のカレンダーのテーマは「多様性」です。世界では宗教や民族の対立、地域紛争、排外主義的な行動がニュースを賑わせていますが、私たちは同じ空の下、それぞれの地において生活を営んでおり、空に国境はありません。文化や宗教が違うことをお互いが認め合い一緒に笑いあえる社会でありたいと願います。

購入ご希望の方は、地球の木事務局までご連絡ください。

■写真家：野町和嘉氏
■サイズ：壁掛け：32cm×38.5cm（使用時 60cmx38.5cm）
　　卓　上：15.5cm×17.8cm×7.5cm
■価　格：壁掛け：1,600円（税込）　卓上：1,300円（税込）
■制作元：日本国際ボランティアセンター（JVC）

## イベント情報

### おせちから世界が見える?!

**12月13日（木）14:00〜16:00**
**場所：神奈川区総合庁舎5階神奈川区民活動支援センター交流室**

「そろそろお正月の買い出しをしなくっちゃ…」新たな年に想いをめぐらす、師走のひととき、おせち料理の食材が、世界のどこから来ているのか、何キロ旅して私たちの食卓に届くのか、「フードマイレージ*」についてご一緒に考えてみませんか？ おせち料理をめぐる、グローバルな話題は、きっと、新年の食卓を賑わしてくれるでしょう♪

*フードマイレージとは、食料の重量×距離で算出する環境負荷の指標です。

参加費300円、卓上計算機をお持ちください。
お申し込みは地球の木（045-228-1575）まで。

### よこはま国際フォーラム2019

**2019年2月2日（土）、3日（日）**
**10:00〜17:10**
**場所：JICA横浜（みなとみらい）**

地球の木では2月2日（土）11:00〜12:50に「いちょう」の部屋にて、地球の木のフェアトレード（分かち合いクラフト）がカンボジアでどのように作られているのか、そこに込められた想いとともにお伝えします。また、地球の木がカンボジアで支援をしている、暴力を受けた女性たちのための自立支援施設の活動についてもご紹介します。奮ってご参加ください。

### ネパールスタディツアー2019
### 〜支援地を訪ねるふれあいの旅〜

地球の木は、ネパールで現地パートナーNGOのSAGUNと共に教育やヤギの飼育による収入向上のプログラム「幸せ分かち合いムーブメント」を進めています。「幸せを分かち合う」ってなに？「本当の豊かさ」ってなんだろう…。自然の懐に抱かれた村々、世界遺産の古い街並みを訪れ、お祭りも体験できるディープな旅です。

**■日程：2019年3月15日（金）〜3月24日（日）**
**■訪問地：カトマンズと支援地の村**
**■申込締め切り：2019年2月14日（木）**

＊詳細は地球の木事務局まで資料をご請求ください。

### がんばる笑顔を応援しよう
### 〜幸せ分かち合い年末募金〜

皆さまの日ごろのご協力に心より感謝申し上げます。今年も残りあとわずかになりました。ネパール、カンボジア、ラオスの人たちと、幸せを分かち合えるよう、皆さまからのあたたかい募金をどうぞよろしくお願い申し上げます。詳細は同封のチラシをご覧ください。

### 寄付領収書について

地球の木へのご寄付は、所得税等の控除対象となります。寄付金控除を受けるためには、当会が発行する「寄附金受領証明書」（領収書）を添えて確定申告することが必要です。2018年の領収書は確定申告に間に合うよう、2019年1月下旬のお送りいたします。なお、振込用紙などで「領収書不要」とお申し出いただいた方へは送付されませんので、必要となった際にはご連絡ください。

また地球の木ではサポート会員の会費も寄付金控除の対象になります。サポート会員の会費はご連絡いただいた方のみ領収書をお送りしておりますので、領収書の必要な方でご連絡いただいていない方は事務局までご連絡ください。

特定非営利活動法人 地球の木 EARTH TREE

### 編集後記

＃me too 女性たちが次々と声を上げ始めた今年。人種、性別、年齢にかかわりなく誰もが互いを認めあい、素直に自分の思いを呟き続けていくことのできる社会を失わないためにはと…平成という時代の終わりに考える。（T.K）